

広島大学人間生活系コースにおける 家庭科教員養成カリキュラムの検討

—多様な家政学専門家の意見に照らした課題と展望—

鈴木明子・平田道憲¹・工藤由貴子²・岡陽子³・正保正恵⁴・佐藤ゆかり⁵
村上かおり・松原主典・高田宏・梶山曜子⁶・金崎悠⁷

(2021年10月5日受理)

Suggestions to Improve the Home Economics Teacher Training Curriculum:
A Collation of Expert Opinion

Akiko Suzuki, Michinori Hirata¹, Yukiko Kudo², Yoko Oka³, Masae Shouho⁴, Yukari Sato⁵,
Kaori Murakami, Kiminori Matsubara, Hiroshi Takata, Yoko Kajiyama⁶ and Yu Kanasaki⁷

Abstract: This report is based on a face-to-face symposium and an online information exchange that were held to obtain the opinions of a variety of home economics experts on the essence of home economics and the related issues of teacher training. The purpose was to obtain suggestions for the home economics teacher training curriculum and to plan for future research. Each participant was encouraged to re-examine their thoughts on home economics education—through collaboration with experts with various positions and histories—to define the essence of home economics and teacher training methods. In addition, we obtained guidelines for future steps for the teaching profession and consumers. In the changing teacher training curriculum, the perspective of the creation of lifestyle, as well as consumer development is important.

Key words: Home Economics Teacher Training, Curriculum, Opinions of Home Economics Experts

キーワード：家庭科教員養成、カリキュラム、多様な家政学専門家の意見

1. はじめに

家庭科の学習内容は、生活に関わる全ての事象を含んでいる。また、家庭科の背景学問とされる家政学の研究対象は、人文、社会、自然分野の多岐にわたる研究成果の集積の中にある。家庭科は、このような生活に係る広範な知識や技術を個別に習得するに留まらず、それらの関係性や生活システムを理解し、生活を創造することができる自立した生活者の育成を目指す教科である。この教科の意義が子どもたちに伝わりにくい要因の一つとして、家庭科の本質や学習内容の体

¹広島大学名誉教授

²(元)横浜国立大学

³佐賀大学

⁴福山市立大学

⁵上越教育大学

⁶大学院教育学研究科教育学習科学専攻教科教育学分野人間生活教育学領域院生

⁷国立研究開発法人産業技術総合研究所

系に対する家庭科教師たちの関心が高くないことが挙げられる。

その改善を図るために、教師教育、特に教員養成の課題に着目し、2014年から現在まで広島大学の家庭科教員養成カリキュラムの検討、改善を続けてきた^{1)~4)}。その中で、次の二点を課題として取り上げてきた。一つは、教師教育の早い段階で、家庭科の独自性を理解し、その資質・能力を汎用的スキルとの関係の中で捉えて指導に生かそうとする姿勢を育むことであり、もう一つは、このような家庭科の独自性に基づいて、各専門諸科学を「再構成」された形で展開し、人間生活における課題を総合的に理解させることである。これらはいずれも中教審答申で指摘されている課題であり⁵⁾、背景学問としての家政学との関係における課題でもある⁶⁾。すなわち、家庭科の学習内容の枠組みを学問的見地から再考することにつながり、さらには、コンピテンシー等の汎用的資質・能力と家庭科の教科固有の資質・能力との関係を捉え直すことにもなる。

本報告では、これまでの一連の研究の成果と課題を整理するために、広島大学の家庭科教員養成に携わる教員、他大学の家政学（家政教育、家庭科教師教育を含む）に携わる大学教員および家庭科教育実践に携わる中・高等学校の教員や学生など多様な家政学専門家の関連課題に関する意見を、対面シンポジウムとオンライン情報交換会を通して捉え、家庭科教員養成への示唆を得て、今後の研究への展望を図る。これら2つの場合は、同目的の科学研究費助成事業（代表 鈴木明子）の3年間の研究計画の遂行の中で行われたものである。図1に、カリキュラム検討のための理論モデルおよび課題を示す。助成事業3年間の研究計画においては、家政学、家庭科教育学および家庭科内容学の専門家12名で試案（図2）を構想、実施・検証し、改善のための課題を見いだすことを試みた。図1の中央および右部分では、教科固有の知識・スキル、学び方および資質・能力が汎用的スキルと往還しながら獲得されていくこと、双方を結び付けているのが、教科の本質としての見方・考え方であり、家政学の学問的特徴であることを示している。またその見方・考え方は、カリキュラムを通しての学びや汎用的スキルの訓練の中で鍛えられ、教科固有の資質・能力を高めていくことにもつながる。また、教科固有の学び（図1中央部分）を目指して遂行されるカリキュラム（図1左部分）における主な課題として、「家庭科の本質と家政学を理解する方略」、「学習内容の体系性と生活システムを理解する方略」、「家庭科固有の学び方を教科内容と関連付けて理解する方略」の3点を挙げ、カリキュラム改善の要点とした。

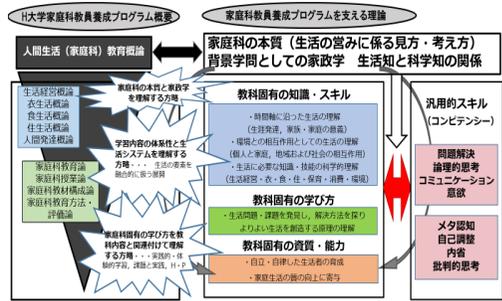


図1 家庭科教員養成カリキュラム検討のための理論モデルと3つの課題

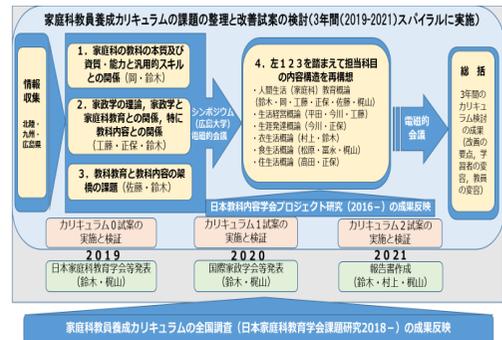


図2 3年間の研究計画及び研究体制

2. シンポジウムの概要と成果

2019年10月20日、広島大学にて、工藤、岡、正保、佐藤、平田をシンポジストとして開催した。鈴木がコーディネーターを担当した。スタッフは、コース教員、今川、村上、松原、高田、金崎、鈴木主催の人間生活教育研究会のメンバー、鈴木研究室院生、学部生等であった。参加者は日本家庭科教育学会、広島県教育委員会に募った。シンポジウムのタイトルは、「家庭科教員養成カリキュラムの協働的創出—教科の本質を問う汎用的スキルに迫る—」とした。その意図は、参加者の家庭科、教師教育、家政学への多様な思いや考え方を共有しつつ、柔軟に受けとめて、今後の教育課程や家庭科の本質や意義について議論し、今後の家庭科教員養成の展望をもつということであった。

企画段階で、家政学と家庭科教育、理論と実践、指導方法と内容、汎用性と固有性など、異なる視点で課題を捉えられるよう構想した。終了後、参加者への質問紙調査を行い、家庭科教員養成の課題、教科観育成の重要性、家政学と家庭科の関係性への気づきなどについて回答してもらった。

シンポジストとコーディネーターを除く参加者は、

大学教員、指導的立場の家庭科教員（指導主事、中・高校長）、家庭科教員、学生（計51名）で、調査票回収率は84.3%であった。各パネリストから提示された課題は、「家庭科の共通性の必要性」、「家庭科の固有性、資質・能力」、「教科専門（内容）の在り方」等であった。回答者全員がシンポジウムの内容を「とてもよかった」「よかった」と評価した。

以下に、「大学教員」、「指導的立場の家庭科教員」、「一般の家庭科教員」、「学生」別に、参加者の各質問に対する記述を抜粋し下記に資料として示し、考察する。
【シンポジウムに参加して、家庭科指導を担う教師にとって、最も大切な能力は何だと考えましたか。】

＜大学教員＞

まずは家庭科教育の目指すものを教師自身が把握しておくことが大切、さらに、教師自身が家庭科で求める望ましい生活を送れるようにすることが必要
家庭科の学習させたい課題を学習面の課題として認識させる力
特に工藤先生のご講演から「教える側（教師）」が「家庭科」や「人間生活」をそもそもどのように入れているかが極めて重要、よってこれらを捉える能力が重要
問題発見能力が大切
自身の生活を楽しむ工夫する力、生活を面白がる資質
生活に意識して、自分自身が知らないこと、わからないこと、見えてこないことがあることを受け止め、知ろうとする能力が必要
「探求力」家庭科は生活や社会の変化を取り入れるべき内容だからこそまずは当たり前を見直し多くの情報を得ようとする探求力が必要
生徒の実態・社会の様々な課題を認識する能力
個人・社会などコミュニケーションする力、社会を変えるパワー
個人・社会の変化に向き合い授業を構想実践する能力
教師個人が家庭科の重要性や必要性について認識し、自信をもつこと

＜指導的立場の家庭科教員＞

児童生徒の実態を把握し、生活欲求課題をもたせ、個に応じた指導を行いながら、課題解決と新たな課題に向かうための指導計画と学習指導ができること
教師としての自分自身をみつめること、学び続ける姿勢を持ち続けること
子どもの未来が輝くために、家庭科にできることを考えられること、プラス専門性（深い専門+浅く広々とした土台）
家庭科の基礎的・基本的な知識・技術を生徒に活用させて、主体的に課題を解決させる授業展開ができる力
「どんな子どもたちを育てたいか」「どうやったらそれが育つか」を学んだ上で、それをベースに「自分の言葉」「自分の考え」としてもてるようになること、教師自身が（教育における）自らの課題を解決しようとする意欲と方法をもちつこと

＜上記以外の家庭科教員＞

高い専門性と教育力（育成する力）
最も大切かはわからないのですが、変わっていくことができること、情報を収集すること、人とつながれること、暮らしを変えようと思えること
ものごとを幅広く見ること、俯瞰すること
質問型のアプローチができるための質問力
教師自身が生活者として生活欲求をもち続けること
家庭科に対する教科観をもつこと、生活課題を教師自身もみつけることができること、それを児童・生徒の問題解決の課題設定などに生かすこと
家政学および内容学に相当する内容からくる家庭科の幅広い学習内容を統合する能力が必要かと改めて考えました。（正保先生平田先生のお話にあったように、内容学間のつながりを意識し、子供たちが学びを生活に落とし込めるように伝える必要があり、その根底には家政学原論の考え方があるとわかりました）
題材を組み立てる力、題材を考えることでどのような能力を育てられるか、その題材を家庭科としてみつめる力

生活者としてすでに暮らしている人、人間味がある人、現場と子どもが好きの人
専門性もちながら、幅広くつながりを広げる力が大切、自分自身の立場にあてはめると、生徒一家族コミュニティをつなげるために自分自身の教科観を深めつつ、他の専門性につながる子どもたちをつなげることが大切、時代をよみつつ家政学のような先人の知恵を活かしたい
家庭科のユニークさを持って授業を行うことができるように見方・考え方に専門的な内容をくじぎしていくこと、深さと統合が必要であると意識すること、課題を生徒に持たせるための教師の工夫

＜学生＞

家政学の専門を一つか二つ明確に持ち、学問的に生活のみをみる視点を持つておくこと
家政学の内容を幅広く知っているだけでなく、家庭科をなぜ教えるのか家庭科教育の本質をとらえる力
社会と子どもをつなぐために各教師自身が自分の専門や特徴経験を生かして授業を創り展開していく力必要
自分自身が主体的な生活者であること、主体的な生活者としての視点をもっていること
子ども自身の課題を無理矢理でなく自然にみつけさせ、自分自身でその課題を解決させるための言動
生徒児童への問いかけ方法
生徒たちとともに生活課題について考え、「何ができるようになりたいのか、そのために何をすればよいのか」をともに考えていく能力ひとりひとりが生活能力を高めることが目標ではなく能力を高めた上で他者と協力していくことができる能力が大切
生活欲求を持たせることが大切というお話に共感でき、生活欲求を持たせる力・能力が教員に大切
「生活」全体を見る力と自分が他者や社会などいろいろなものと関わって生きていることを生徒に伝えられる力かな、また、生徒に「あなたはどう考える」というように多くの考えがあってよいということを伝えられることが大切

立場や履歴によって独自の傾向はあるが、多くの参加者がシンポジウムで得た情報を自分の認識や経験と照合して多様に解釈し、今後の指針を得ようとしている様子が見られた。家庭科教員は、生徒目線を強調する表現が多く、学生は自分自身の課題と結び付けた言及が多かったが、家庭科教育の本質を捉えることや、自分自身が生活者として成長することの必要性に気付いたことは成果と捉えられる。

【シンポジウムに参加して、そのような能力をもった教師を育てるために、教員養成段階の課題は何だと思いましたか。】

＜大学教員＞

学生自身の生活をまず自分でよく「知る」機会を与える、このときに生活欲求がなかつたり考えるべき課題がみつからなかつたりしたのであれば、将来学校現場に出た時に子どもたちに生活欲求や課題を持たせることは難しい
家庭科観を学生の立場、教員の立場から思う存分共有すること、時代社会の変化を捉え、対応しようとする
生活を見直す課題をみつけネットで調べ、解決する、解決できなくても知らないことがあることを知って検討する、意識させることが大切
今日の教科観を育てること、教員養成において教科観、背景学問との関係を議論すること、発言させること
4年間生活を見つめ、人と共有するには十分な時間だと思うので、様々なことを経験していく場を大学が用意することが大事
自身の生活のみだと視野がせまくなるので、本当に多くの生活・暮らし・文化を知る体験する機会が必要、実践・実体験と達成感を得ることで異なった状況でも施行錯誤できるようになるのではないかと思います
家庭科で扱う範囲の広さと養成に関わるスタッフの少なさのギャップ
これまで以上に幅広い知識・社会に対する関心・教師としての資質を身に付ける必要性

学生は何事においても正解を求めようとしすぎる。正解ばかりを求める学生が教員になると、子どもにも正解を求めるようになる。そのため、正解不正解があるような授業をしてしまうきらいがある

<指導的立場の家庭科教員>

自分の生活体験などと結びつけられた、体験的な学習からの知識の獲得、安全に実習を行い、適切な技術指導ができるだけの知識と技能
この時間では答えがみつけれなかった
家庭科教育の価値づけをすること、例えば、ジャケットを縫うことが生徒の人生に何をもちたらすのか考えさせたりすること
これまでの教師は学生時代に自分自身がホームプロジェクトをやっているはずだが、本当の意味での（現在求められている）課題発見・解決の体験がないのではないが、そのような体験が必要
専門性を深める機会（自分の専門分野としても家庭科を指導する上での内容としても、本質的なところも子どもとつなげることとしてのところも両方）家庭科を「ふかん」で見、全体をとらえる力をつけること

<上記以外の家庭科教員>

知識・技術の確かな定着（学生の自主的学びとしないこと）基礎基本は学校で学びそれを生かして教員として創意工夫できる、できないまま教員にさせてはいけない
様々な価値観や考え方にふれる。普通教科「家庭」だけでなく専門教科「家庭」にもふれる機会を持つこと（他教科や小中高それぞれを知る機会など）
（題材をどう捉えるのか等）全体題材を見て育む資質・能力につながる学習題材の構想力・学習題材の構想できる力
自分の生活を振り返り、他者と比較し、課題を発見することを繰り返す必要がある、また生活を総合的にみるための様々な知識を日々身に付けていく（他教科の内容も含めて）機会があるとよい
内容学を学ぶ際にも教科観とつなげて学ぶことができると現場の実践にもつながる
家政学そのものについて、また、原論についてたくさん学ぶことができるかと家庭科教員としての根っこになる見方考え方が身に付くのかな
「家庭科する」ことがわかる、そのおもしろさを体験できる講座があるといいました
よくわかりませんが、自分は教育学部出身ではありませんので…幅広い生活体験と知識興味関心をもつことが大切だと思う
「教える人を教える」という意識を持った先生に教わる学生は幸せだと思います。プロとしての意識面と知識・技術面と双方を教わりたいと学生はおもうのではないかと

<学生>

家庭科の教科観を持つことは大切だと思う。そのためには他教科をみることは有用と思う
家政学の各領域をつなぐものとは何かを考えていくこと
教育実習等、体験して学ぶことをより豊富にすることで、自分の中から課題や価値を生み出す経験を行い、理想とする教師像を育てていくこと
教科教育学と教科内容学のコラボレーション、小学校教員養成での家庭科の重要性、実験実習など
自由度の高い教科だから、多面的に課題解決策を見いだせるように、選択式の授業をもっと意欲的に履修するよう呼びかけ、人間生活のプロフェッショナルを育てる（目指す）必要がある
まず、生徒児童の発達段階における課題を学習する、そしてそれに応じてどのような問いかけをしていくべきか考える必要がある（生活欲求をどのように充足させるか、どのようにやる気をださせるか、満足感だけでいいのか、失敗させるような課題をだしてよいのかなど）
学校や専門的な知識からさらに他の視点から家庭科を見つめて他の協力（地域）を得ながら教育していくことが必要だと思いました
知識や技術だけでなく、中高生の生活の実態などについてももっと考えさせる必要があると思う
幅広い知識を増やす、学んだことを生活におとしこむような養成が必要

立場に関わらず、家庭科という教科の独自性や課題、および現在の学力観の変化を踏まえて教師教育を捉えているかどうかによって多様な言及が見られた。これは、身に付けるべき家庭科の「専門性」や「知識・技術」を、理論ベースあるいは実践ベースで構造化、体系化して捉えているか否かによる差異とも考えられる。

家庭科独自の汎用的スキルを問い直す必要がある。

【シンポジウムに参加して、家庭科教員の家庭科観（教科独自の意義や役割に対する考え方）を育てることは重要だと考えましたか。また、その理由は何かですか。】

回答者全員が「非常に重要」「重要」と回答した。

その理由は次の通りであった。

<大学教員>

「教える」ためには何事においてもそれに対する考え方は必要なのである、家庭科においても家庭科観は欠けてしまったら成り立たなくなる
先生方のお話から家庭科の「独自」「固有」という視点はしっかりもっていきたくて改めて思いました
多くの内容を含んでいるので、一人で完結するのではなく、補完できる科目ネットワークを構築できればよい
家庭科のイメージが変わらない
家庭科教員だけでなく、他教科でも意識させるため説明できるぐらいの力が必要だと思います
家庭科教員は家庭科の単なる内容だけでなく、それがどう今後生かせるのか時間軸の広がりを意識して授業する必要があると考えるから
参加前も重要だとは考えていた
改めて新しい価値を創造する教科であるということ
家庭科教員になるには必要

<指導的立場の家庭科教員>

家庭科観（見方・考え方を含め）をもつことによって、一部総合的な学習の時間、社会科学等の内容と混同せず、指導を行うことができると考えるから
授業づくりの根となるものだから
まさにその柱に向かって思考が深まる内容構成だったから、パネリストの皆さんのそれぞれのお話が一つ一つのベースでした
様々な視点からお話を聞かせていただいたことで、家庭科の意義を改めて考えることができた、教師の視野が狭くなっては広がりのある授業ができない

<上記以外の家庭科教員>

専門分野の学びを理解していない教員は教員としてありえない
家庭科教諭の中でも、自分の専門性にとらわれている、作って終わりのような授業、何十年も同じ内容などがみられます、まとめること（家庭科観を）は難しいかと思いますが、若い先生方、教科観をもって（育てられた）いる人が先生になっていくことで変わっていくと思います
「家庭科で行う」ではなく、「家庭科を行う」という視点が（教材に取り入れたいと気づけた）求められると気づかされました
児童・生徒の生活欲求を引き出すためにも教員の教科観が明確であるとよいと思います
教科観は指導のベースになると考えます
ある程度共通した教科観が根底にあった上で各自の教科観を育成できると「先生によって全く違う学習になる」イメージが変わるかもと思いました
家庭科を教えることに意義を感じほりをもって教育にあたって欲しい
科学的に認識すること、自分家族コミュニティをとおして、考えさせることをしっかり体しこみさせておかないと、そのような授業ができないと思うからです
日々の学校の仕事があり、専門的な授業に関する勉強がおろそかになっていると反省している
「こうでなければいけない」ではなく、様々な家庭科観があってそれぞれが子どものためにという想いがあるからこそその未来のために教育だと思います、相互理解

<学生>

家庭科教師の意欲や研究動機にもつながります
単に授業を行うだけなら教科書に従えば内容を網羅することはできます、しかしそれでは知識を学んだだけで終わってしまうので、子どもが生活を豊かにするためには教師が家庭科観を持つ必要があることがわかった
家庭科で行うのではなく家庭科を行うという独自性

深さと統合の大切さがわかった。専門性は深くある必要があり、それらを統合して別々ではなく、それらを生活としてまとめる必要がある
家庭科は社会や日常生活と密着していると学んだが、必ず個人、家庭、コミュニティが基盤であることを忘れてはならないことを知った、実習ではそれができなかった
その柱がしっかりしていないと教えていくことがズレていくと思うから
教科独自の役割を考え、軸をしっかり持つことが重要であると考えから
特殊な科目なので、教員が意義を学ぶことでよりよい教育につなげることができる
家庭科のユニークさという語がありました。家庭科にしかできないこと家庭科だからできることを学校教育の中で考えていく必要がある

家庭科教員にみられた「ある程度共通した教科観が根底にあった上で各自の教科観を育成できると…家庭科のイメージが変わるのでは？」という意見は、教員養成への有効な示唆と考えられる。「共通した教科観」は、換言すれば各自の教科観を発達させていくためのベースとなる考え方であり、その情報教示の必要性を示唆していると考えられる。また、教科観をもつことが、家庭科の専門性や内容構成の再考につながることへの気づきは、家庭科教員に多く見られた。

【シンポジウムに参加して、家庭科と家政学との関係性について、新たな気づきがありましたか。】

回答者43名中、4名以外は「とてもあった」「あった」と回答した。その内容は次の通りであった。

<大学教員>

どのようなつながりがあるのかまだ自分の中であいまいでした、これから見出せるよう努めます
家庭科で教える内容の意義を強化する
理想と具体的アプローチの道筋が少々見えた気がした、また、考えるモチベーションをいただいた
教員養成大学での教科間の担当者の共通認識、小学校～高校の授業担当者の相互の理解が必要
家政学、家庭科教育の専門家さえもいつも悩んでおられることを知り安心しました
家政学原論の重要性を改めて感じました、それを知ることで家庭科の授業の自由度の幅や創造的な発想ができる
指導要領に家政学が透けて見えるように作る必要があるという考え方家政学は家庭科を社会的に重要な教科であることをPRする場をつくること

<指導的立場の家庭科教員>

自分自身の中で現時点で消化しきれていません
自分自身の考えが広がった
学問としての姿と個々の生活の（個人の生活にせまって）課題を解決していくための学びとしての姿が往還していくということ

<上記以外の家庭科教員>

深さと統合
バックボーンとして必要だと思いました
家庭科の独自性をより明確にするものとして家政学が存在しているのではないかなと思います
背景学問ということを変更して…
原論の重要性を改めて思いました
親学問は家政学であるということを変更して感じました
家政学を知ること大切だと改めて感じたことと新しい家政学家庭科の形があるのではと気づかされました、バックグラウンド

<学生>

家政学の研究方法を基に、家庭科教育の内容が他教科にも発信できるものになり得る
--

生活欲求をもっていいんだと生徒に気付かせることが大切だということ（すみません。家庭科と家政学の関係ではないです）
学習指導要領をみながら、もう少し家庭科のバックグラウンドを考えるようにしたい
家庭科の基盤に家政学があることがわかった（常に個人、家族、コミュニティを基盤としている生活欲求）
家政学の考え方も家庭科に取り入れるべきだと思った
「家庭科」は「家政学」とイコールではなく子ども一人一人にそった「教育」という要素をしっかり入れないといけないということに改めて気づきました

家庭科と家政学の関係性について、多くの参加者が何らかの気づきがあったと回答したものの、それは双方がつながっているという認識にとどまっていた。家政学の学問としての独自性を捉えることは、本シンポジウムの時間内では困難であったことが推察される。しかしながら、科学的根拠をもって家庭科の学習内容を構成したり教材を精選したりするために家政学という独自の学問が存在することに気付いたことは成果と捉えることができる。また、家政学の個別領域の成果ばかりではなく、それらを統合する独自の理念が家庭科の目標の背景にあることに気付いているのではないかと推察している記述も見られた。

【本シンポジウムに参加しての感想、意見】

<大学教員>

“個人”“自分”“生活者”といったことが家庭科のキーワードの一つであると思いますが、そもそも生活とは何か子どもにとって分かっていないのかと感じております、もしそうだとすれば、その状態で“どうありたいのか？”ということを考えるのは大変難しいことであると思います、子どもの実態もよく分析する必要もあるかと考えました、家庭科教育の在り方について考える大変貴重な機会で本当に感謝しております
「様々な価値の中で自分を揺らす」という鈴木先生のまとめがとても心にくる分がありました、創出には「生みの苦しみ」があるかと思いますが、楽しく苦しみ続けていこうと決意させていただいた貴重な時間でした
社会に物申す生活者の意義、権利と義務への理解までにもつながる資質能力が教員に必要と思いました
とてもぜいたくな時間で一気に聞くのがもったいなかったです、次回もぜひ企画していただきたいです
第一線で活躍される先生方のお話を拝聴できて、大変勉強になりました、考え方、授業の持ち方からだけでなく、評価方法の面からのアプローチでのシンポジウムもあるとうれしいです（質問に答えていただいたからこそ実践的な内容がまた聞けると嬉しいです）カリキュラム創出への観点についてもう少し知ればよかった

<指導的立場の家庭科教員>

パネリストの先生方の専門的な話を聞くことができたいへん参考になりました
多様な視点からのお話を聞くことができ、大変有意義でした

<上記以外の家庭科教員>

とても勉強になりました、…困難校の時は自立することを柱に授業を行っていましたが、進学校に来て、リーダーを育てる、教員志望の生徒を育てる時に何を軸にすればいいのかと悩んでいました、今回参加させていただいて、少し自分の進むところが見えてきたように思います、明日から生活課題をみつけられるように投げかけていきたいと思います
大変勉強になりましたが、現場とのギャップを感じたのも事実です、(40人での授業ではなかなか難しいと思います)たくさん家庭科の教員を養成してほしいです、人不足で困っています
工藤先生がおっしゃられた「今の子ども達は生活欲求を持っていいように育てられていない」というお言葉にハッとしました。社会に逆行せず、受動的に生活してきた子ども達に自分の生活を振り返って課題を見つけようと言ってもできないのだと気づきました

家庭科に限らず教科観を持たない教師は多いように思います（特に小学校）、…誰もが核となる教科観をもつことで指導もより充実してくると思います、また個人的には教育実習のあり方に課題を感じています、大学での学びと実習がより豊かにつながるとよいと思います

家庭科のすみわけがはっきりつながる気がします。厳しい環境にいる子ども、評価については今後の私の課題として残りました

実際の授業にとりこめることがたくさんありました、もっと勉強したいと思います、多方面の方のおはなしはあつという間の時間で充実した時間でした

様々な立場の先生方のお話を聞くことができ、本当に貴重な時間でした、自分自身の課題は多々ありますが、「豊かによりよく生きるために」を問い続ける家庭科に携わることができていることに改めて教員として誇りがもてました

<学生>

元気ができました。先輩方の心強い意見は本当にありがたかったです。「社会が求めていることは家庭科の言葉で語るができる」は感動しました。「歩く Well-being」は生徒に求める一つの方向性であり目標ですとても興味深いお話をきくことができ、自分の中の家庭科というものがあるのかということに新たな価値をいただくことができました。教育現場に実際出てみると大学で学んだことなどのギャップを感じ不安になることがありますが、子どもの生活をつなぐ役割を生徒と楽しみながら互いに協働していきたい

先生方の話をもう少しじっくり聞かせていただきたいのですが、家庭科の大切さを改めて気づきました、家庭科はもっとはみだしていんだなと思いました

自分はどうして家庭科の教員になりたいのかを見つめ直すよい機会になりました、おもしろい（「トマト×くらす」）授業があるなと思い、自分も生徒にそんな授業を提供できる教育者になりたい

小・中・高と家庭科はつながっていて、それが関連して資質・能力を育てていくことがわかった、現在、小学校免許も家庭科中高と合わせて取得中であるが、関連していることを念頭において学習していきたい、T型とTT型の理論がとても納得できた、総合性もその深さにも必要であるとわかった

これまでにない視点で家庭科について考えることができました、貴重なお話をありがとうございます

様々な考え方を持たれた先生方のお話を聞くことができとても学ぶことができました

「生活欲求」という言葉が心に残りました、それぞれの生活が違ったり、これからの変化の激しい社会の中での生活を考えたりするのはこれまで通りにはいかないことが多く出てくる、しかしどんな状況になっても一人一人に「生活」はあるのでその中から自発的に出てくる欲求に向き合える家庭科であるべきだなと思いました

各参加者の教育実践や研究への関心の差異に起因する多様な意見がみられた。しかしながら、本シンポジウムの共通テーマやシンポジストから得た情報は、各自の家庭科の資質・能力に対する認識を揺さぶり、今後の教育研究活動への刺激になったと思われる。

3. オンライン情報交換会の概要と成果

2020年11月22日、鈴木がホストとなりオンライン（zoom）で情報交換会を開催し、鈴木が進行を担当した。参加者は、コース教員、今川、村上、松原、富永、高田、金崎、鈴木研究室院生、学部生等であった。主旨は、1年間の関連の研究成果を報告、共有することであった。内容の詳細は、次の通りである。

- ・家政学会第72回大会ポスター発表内容の報告（梶山、鈴木）【家庭科教員養成カリキュラムに関する研究】
- ・日本教科内容学会出版書における家庭科内容構成の提案と批評（平田、工藤、佐藤）【家庭科の仮説の説明とシラバス；7回大会課題研究会発表資料・

平田他（家庭）】

- ・広島大学教育学研究紀要（2020）の報告（衣・食・住生活概論）（鈴木、村上、松原・富永、高田、金崎）【研究科紀要（0929提出版）】
- ・日本家庭科教育学会第4次課題研究（国立大学法人大学の中等家庭科教員養成の実態）（鈴木他）【学会課題研究2 1-A, 1-B】
- ・英国 impact 社のネット記事（鈴木、工藤、平田）【000_000_Akiko Suzuki_Impac1.pdf】
- ・中等家庭科教員養成カリキュラム全体の方向性と課題について意見交換（広島大学の課題の検討を通して全国の課題と今後の方向性を考える）

参加者は14名（教員養成に関わる大学教員12名、家庭科教員で社会人院生2名）であった。事後にメールで寄せられた意見は、次の通りであった。

【シンポジウム（2019年10月）の成果報告についてのご意見・ご質問・ご感想など】

広大の学生さんたちが「とても良かった」ではないことが、彼女らが「いつも聞く話」に近い感覚だったことを表しているように思いました

研究がどのように進んでいるのかについて、よくわかりました、自分自身の報告については、プレゼンを工夫すべきだと思いました、鈴木先生の研究の進め方、全体のまとめ方に多くのことを勉強させていただいております、ありがとうございます。先生方との意見交流の時間がもう少しあればよかったと思いました

いつも思うことですが、このシンポジウムのようなことに関心のない家庭科の先生も多くいると思うので、そのかたがたにもシンポジウムの成果を共有してもらうにはどうしたらよいのでしょうか

実際にシンポジウムに参加して、家庭科と家政学の背景にある家政学の存在について改めて考えさせられた、家庭科と家政学の意義を意図的に生徒に理解させるといよりは、家政学自体が諸科学を生活に落とし込んでいく役割を果たしているため、家庭科は他教科の知を生活に落とし込んでいくという意識を持って授業を行うことで、家庭科と家政学の意義が伝わるのではないかと感じた

家庭科で異なる専門性をもつ研究者のお話を伺える機会を大学教員から学生までを対象にして開催されたことは価値のあることだと感じます

ポスターの資料を見せて頂き、改めて「家庭科と家政学の関係性への気付き」が多くの参加者に生まれたことは成果だと思いました、しかし「とてもあった」と回答した割合は他の質問項目と比べて少ないことから、家庭科教育と家政学の関連性を考える企画の重要性とともに、教員養成課程のカリキュラム上の課題が潜んでいると感じました

シンポジウム参加者のアンケートは十分分析できていないですが、現場の先生や指導主事さんの教科観や家政学との関係に対する考え方が様々なので、またシンポジウムなど行う機会があれば、現場の率直な悩みなど聞いても良かったと思いました

これまで関わってきたことを整理していただき、改めて自分も整理できました

現職の家庭科教員の認識と養成機関の教員の認識の違いから、どのような対応が必要なのか考えなければならぬと感じた。

（家庭科と家政学の関係性の結果について）個人的には、家政学原論を学ぶことで今後の家庭科教育の方針になると考えています、現場の方に家政学を意識していただくためには、原論を意識しながら内容学の研究をせねばならず、その結果を家庭科教育に繋げる必要があると感じました

シンポのテーマや内容が教員養成の視点であり、教育現場の先生方や学生にとっては、わかりにくいものだったかもしれません、異なる立場の方々に向けて、それぞれに、私たちの研究成果の中で伝えたいことを適切な内容に転換して伝え、協議する場を設定することも必要と思いました、オンラインでのシンポ開催が一般的になってきた現在、それも可能ではないかと考えます

【教科内容学会での提案と批評についてのご意見・ご質問・ご感想など】

④生活自立、⑤問題発見/解決、⑥生活の創造は他の3つとマトリクスになるのではないかと思います。でも、そうすると生活の営みに係る見方・考え方が図と同じようになってしまうので、さらにその先のコンピテンシーの図が描けたいのですが…
岡先生から、「共生」がどこにはいるのかみえる形で…のようなご意見というご質問がありました。平田先生のご回答の通りと思いつつ、「共生」のようなワードを見る形で示していくのがよいのか、それともそうしない方がよいのかについては引き続き考えたいと思いました
わたしは提案について発表しましたが、お二人のご批評、岡先生のご指摘はたいへん参考になりました
平田先生のご提示くださった教科内容学の①～⑥について、①～③の内容を④～⑥の過程で学習していくと考えると、どのように年間計画を立てるか、本時の授業をどのように展開していくかが考えやすくなると感じた
④～⑥の解釈をもう少し聞きたかったです。
平田先生による教科内容構成のまとめのご発表により、さらに家庭科という教科の内容構成の全体像が掴めたように思いました。工藤先生、佐藤先生の批評論文のご説明も、その要点を理解するうえで、大変有用だったと感じました
三人の先生方のお話を聞き、大変勉強になりました。ありがとうございます。また、会議の折に質問をさせて頂いた件、自立と共生の「共生」の部分を教科の認識論的定義の中に表現できるか考えさせられました
佐藤先生もおっしゃっていましたが、課題発見や課題解決などが、同列に表現されているところに、違和感がありました。内容ではなく、方法だと思っているので。工藤先生の論点は、しっかり考えたいと思いました。勉強になりました
家庭科の取り扱う内容が広範囲すぎて、実際に学校教育で授業を担当する場合困難に感じる先生が存在する可能性が高く、負担を分散するための教科連携・融合、地域連携の具体的方法論を提案していくのもありかと思われました。
工藤先生、佐藤先生が原稿内容について直接説明してくださったので、読んでいたよりも理解ができました
教科として扱う内容は多岐にわたるが、それを実際にどのように授業として進めるのか、また家庭科教員養成にどのように反映させるのか「課題だ」と感じた
教科内容学の方向性とご批評をお聞きすることができ、私にとっては大変よい機会だったと思います。家政学原論の考え方はまだ勉強中なので、先生方がそのようなお考えに至った経緯などがわかればと思いました（工藤先生の「認識論」のお話など）
内容構成④生活自立、⑤問題解決…、⑥生活創造を①②③と同列に置くかどうかは悩んだところですが、これらこそが、家庭科という教科が汎用的資質・能力を支える独自性と言えるのではないかと考えます。家庭科が「よりよい生活を送るための科学的な知識と技能の習得」および「自分の生活観、ライフスタイルをみつつ創造する」こと双方を目指しているなら、④⑤⑥をあえて「内容」に位置付けることも一案ではないかと考えています。ただし、これらを別科目として設定することは、現状では難しく効果的ではないかもしれません。また、個人と社会の関係性の捉えについては、工藤先生のお話を踏まえて、改めて考えてみたいと思います
批評について先生方に説明いただき、よく理解できました

【「衣・食・住生活概論」の提案についてのご意見・ご質問・ご感想など】

「自分自身の振りかえり」と「背景学問に繋げる」視点は素晴らしい、広大が挑戦しようとしていることは、とても重要なことだと思います。リアリステックアプローチで「社会の視点」も加えることで、「共生の視点」へ持っていかれたらさらに良いと思いました

質問したかったことがいくつかありました ①衣食住それぞれの先生方のシラバスには「現代的課題」があるのですが、それぞれの先生方がお考えになる、「現代的課題」は何で、それは衣食住それぞれの「本質的課題」（こういう言葉があるかはわからないのですが、「現代的」ではないという意味）とどのような位置というか関係にあるのかということ、②専門の先生方が設定される課題には教科教育が学ぶべき多くの事柄があるとされています。「衣生活概論」のパフォーマンス課題はどのような経緯から、あのような課題になったのかも少し詳しく知りたい、加えて、ご専門とする先生がお考えになる「豊かな衣生活のあり方」に含まれるべき視点についてご教示いただければと思います。③専門の先生方が授業で学生に設定される課題には教科教育が学ぶべき多くの事柄があるとされています。「食生活概論」で「食生活に関する実践課題（生活問題を個人あるいはグループで設定する）」ことになっているのですが、ここで設定される「課題」についてはどのような印象をお持ちか、教えていただければと思います
提案内容もさることながら、コロナ禍の影響にも驚きました。本題とはそれますが、こうした異変に対応できるようにすることも家庭科の重要な内容だと感じました
内容学の先生方が家庭科や家政学を意識しながら講義を行うことで、学生が家庭科の授業づくりを行うときに大学での学びを活かしやすくなったのではないかと思う
結果にイメージという言葉が頻出されていました。イメージとは、具体的想像という解釈でよろしいでしょうか、思考力につながると思いました。
三人の先生方が、それぞれの概論の要点をコンパクトにまとめて下さっていて、わかりやすかったと思います。詳細については紀要原稿の方で理解を深めることができると考えます。
組織的な取組みが素晴らしい、刺激を受けるとともに、大変勉強になりました。家庭科教育で育む資質・能力や見方・考え方に示された「よりよい生活を工夫する」の「よりよい生活（well-being）」の向かう方向についても、持続可能性という視点から概論の中に位置付けられることは可能だろうか…などと考えました。
学生さんのアンケート結果として、具体的にイメージした課題はなんだったのかを知りたかった。
時間オーバー、資料がうまく見せず失礼しました。時間的余裕があれば、人間生活（家庭科）教育概論の報告も行ってよかったかもしれません。
紀要原稿の概説と補足説明のような内容で行ったが、衣生活内容の全体像も組み込んで説明をすれば良かった
学生が早い段階で考えた衣食住に関わる生活課題が、専門科目を学習した後にどのように変化するか興味がある。
（工藤先生が最後にご提案くださった、「個人の生活課題」と「現代社会の生活課題」を分けることについて）理想的にはそのような尋ね方がよいのだと思いますが、まだ他者との境界が曖昧で社会に目を向けられない学生もいる中で、それは高度な要求なのではないかと感じました。
構想、実践、評価してくださった先生方、ありがとうございます。コロナ禍の中で制約があったにもかかわらず一定の成果が見えたことは、これらの授業構想の意図と展開方法がマッチしていたことを実証できたものと思います。上記3で述べた内容構成④⑤⑥の内容をどのように位置づけるかについて、現在は各論の中で、目標や方法論として学ばせているわけですが、今後、パフォーマンス課題の設定方法や家政学や背景学問の示し方について、さらなる継続的な検討が必要と思われます。

【家庭科教育学会課題研究の報告についてのご意見・ご質問・ご感想など】

12月のご報告を楽しみにしています。
意見はとくにありません。報告時間が短かったので、正直にいうと、よく理解できていない部分もあります。
高等学校で「家庭基礎」のみを履修している学生が多いことから、家庭科専攻の学生も1年生の時には家庭科観に偏りがあるのだと分かった。私自身も、高等学校で家庭科を学んだ記憶が薄く、中学校の家庭科の記憶が濃いので、やはり授業時数が教科のイメージに少なからず影響しているのではないかと感じた。少ない授業時間の中でいかに生徒に意義を感じてもらえるかが課題であると思う。
現場で働く家庭科教師がある程度共通した教科観を持つておくことは、今後さらに重要だと思います。その一つに、生活者の視点からのよりよい生活とは何かを社会的に発信する能力をつけることができるということとは家庭科だけ、というのはいり得ると感じました。

今度のオンライン大会で改めて聞かせていただきたいと思います。調査結果から、家庭科のもつ知識・技能と教科観がどのように結びつくのか、そのつながりを学生に考えさせる重要性に気付かされました。限られた時間の中でもご説明いただいたので、大変勉強になりました。
家庭科教育学会の発表を聞いて、課題や展望を詳しく知りたいと思いました。
来月の学会で詳しく聞こうと思いました。
課題研究の結果明確となった課題について、今後どのように具体的に取り組むのかを知りたいと思った。
(各大学で教科観が異なることについて)興味深いお話だったので、詳細をお聞きしたいです、各大学で異なる、というのが良いことなのか、統一した方がよいのか、ご研究されている先生方のお考えも知りたいです。
十分に説明できず失礼しました。2年間の課題研究の遂行を通して、全国の中等家庭科教員養成組織の思としてみた実態と課題がリアルにみえてきたというのが率直な感じです。「養成」→「採用」→「研修」という「教師教育」のプロセスにおいて、「養成」時期に担保しておく家庭科教員としての資質・能力について、今後まとめていくことになると思います。そこでは、教科の理念・本質を背景学問との関係から思考させる場は欠かせないと考えています。

【全体を通してのご意見・ご質問・ご感想、今後の計画についてのご意見・ご質問・ご感想など】

広大の内容分野の先生方がとても協力的で素晴らしいです。クロスカリキュラム(例えば、保育と食を繋ぐとか、家族と住を繋ぐ等)をやってみることができれば、佐藤先生の言う「生活の総体」の思考につながっていくのではないかと思いましたが、すでにされているのでしょうか。
今川先生がおっしゃった「発達と衣食住が分けて考えられている」をどのように考えて、行っていくのかについて、自分自身、考えていきたいと思いました。
オンライン情報交換会の経験をさせてもらってありがとうございます。いまずくに今後の計画のアイデアは思いつきませんが、広島大学での授業の試みをもう少し汎用性のある内容にして提案できる(現場の授業の参考になる)と理想的かなと思いました。
この議論がまとまると家庭科の価値がより高まると思います。家庭科教師にとって幸せなことです。
内容が盛りだくさんだったため、特に遠方からご出席いただいた工藤先生、佐藤先生、岡先生に十分にお話しいただく時間が取れなかったことが残念だったと思います。ただ、鈴木先生の科研研究の全体像が見通せたことは大きな成果だったと思いました。鈴木先生からご提案があったように、最終的には出版物にまとめていくことに賛成です。ただ、その場合の対象(ターゲット)をどこに置くかが重要であろうと感じました。
最後に「よりよい生活」のよりよいとは何か、わかりにくいといった感想があり、なるほど・と感じました。Well-beingの概念と「よりよい」を関連させながら学生に理解させると、目指すものが明確になるのではないかと感じたところです。SDGsにも直結するこの概念を、学生に深く理解させる場が重要ではないか、そこから家庭科教育への理解が深まるのではないかも思いました。また、衣食住の専門科目の基礎学問として家政学を位置付ける重要性があるのご意見にも納得しました。
貴重な機会をありがとうございました。今後の展開として、現場の先生との意見交換会や現場の先生である社会人院生さんのD論テーマと絡めてすすめてはと思いました。
高等学校における総合的な探究の時間を他教科教員と共にどのように思考・実践していくか、教科+αまで展開することも今後検討してよいのではないかと考えました。
自分が発表して感じましたが、オンラインの場合のタイムキープは難しいと思いました。タイムキーパーをおくか、各自できちんと測ることを義務化するなどしておく必要があると思いました。
家庭科教員養成から実際の授業実施まで多くの課題があり、それらにどのように対処していくか検討する必要があるように感じました。
このような時勢の中、開催していただきありがとうございます。家庭科教育学会の課題研究に関しては、知らないことの方が多かったため、勉強させていただきたく思います。コロナ禍では難しいですが、直接先生方と気軽にお話してできるような機会が来ると嬉しいですが、今後ともよろしくお願ひいたします。
学力観の転換、社会や生活の激変の中で、家庭科教育において大切にしていく理念をベースにしつつ、現在の免許法や教科の枠組みにこだわらない、人間生活教育とその指導者育成の方向を提案していたらと思っています。

コロナ禍の中で、オンライン環境での情報共有を試みた。その成果も見られたが、時間制限の中で、情報交換まで至らず、不消化な状況で終了することとなった。情報提示の仕方に課題があったと思われる。オンラインの形態で情報共有、情報交換を行う場合は、テーマを絞り、短時間の会を繰り返し実施することが有効ではないかと考える。

しかしながら、多様な立場、履歴をもつ教員が協働して家庭科の本質や展開方法について考える2つの場を設けたことによって、それぞれに少なからず刺激を受け、自分の家庭科教育への思いをみつめ、教職に関わる者として、あるいは生活者としての今後の歩み方への指針を得たことが見て取れた。

4. 他大学の家政学専門家の本取り組みの総括

上記の2つの共同の場を設けたことについて、本研究メンバーである他大学の研究者から、次のテーマで言及してもらった。「教育課程における家庭科教育の独自の価値と大切さを、自信をもって子供たちに伝え、追究できる家庭科教師を育てるために、中等家庭科教員養成で必要なことや課題について、本研究の経緯の中で各自の専門の立場から改めて提案する」

工藤、岡、正保、鈴木は、家庭科教育学および家政学の研究に関わり、岡と鈴木は家庭科教育学、正保と工藤は家政学の理論研究と実践研究の蓄積がある。佐藤は教員養成における教科教育と教科内容のコラボ研究の実績がある。平田は、生活経営学の専門の立場から本コースで家庭科教員養成に関わり、研究成果を家政学会で発信してきた。梶山は親の子育て観と生活技能の習得実態から家庭科教育にアプローチしている。以下に各自の回答を資料として示す。

<p>【平田】</p> <p>中等家庭科教員養成で必要なことの1つは、家庭科の達成目標である生活自立、生活問題発見、生活問題解決、生活創造をどう指導するかということである。この達成目標に対応する直接の学問は、現時点ではない。したがって、家庭科教員養成の授業のなかで、各教員がこの達成目標を共通に認識したうえで学生に指導していく必要がある。広島大学人間生活系コースの取り組みはこの方向を目指していると評価できる。改善をはかりつつ、継続して取り組んでほしい。</p> <p>中等家庭科教員養成の課題として次の二点を指摘しておきたい。ひとつは、生活と相互作用する対象の範囲を広く考える視点を身につけさせることである。具体例として持続可能な開発目標の視点がある。開発目標のすべての視点を家庭科だけで教えることは無理であるとしても、家庭科教員養成のなかで、学生にこのような視点を身につけさせる工夫をすることが第一の課題である。もうひとつは、生活変化にどう対応したらよいかということである。スマートフォンなどの情報環境を例にあげれば理解できるとおり、生活変化は急速であり、しかも現時点で将来を予測することはむずかしい。しかし、家庭科が生活事象や生活の総体を対象とするのであれば、教員になってから、そのような生活変化に柔軟に対処できるような能力を身につけさせることが第二の課題である。</p>
--

【工藤】
 価値観、行動、ライフスタイルの変容、持続可能な文化の創造が地球規模で問われている。特に、SDGsに象徴されるような大きな社会変革と、そのために求められている「深い変容」をもたらす個人レベルでの変革的行動が求められている。学校教育においても、正解のない問いを大切に、子供自身の主体性を尊重する課題解決的方法論、学習の組み立ての再発見、まさに教科全体の家庭科化現象と呼べるような変化の渦中にある。教育全体が「より良い生活の実現」に向かっていく時、家庭科の独自性がより強く問われている。このような、家庭科教員養成課程で必要なことは、「信頼」と「共感」、それを培う「実感」、家庭科の中核をなすこの3つの中核を、家庭科の授業を通して如何に育てるかを探究することだと思う。小中高等学校どのレベルでも、衣・食・住・環境・消費・地域との内容を扱う時にも、それを常に上位目標とした授業展開ができる教師の育成である。

実習を大事にした生活知識・スキルの習得、それが子どもたちにもたらす確かな手ごたえと実感、「やればできる」という自分への信頼感の醸成、それらが、年間を通して提供される幅広い時間軸、空間軸を捉える視点と方法のもとで応用され、生活の包括的な理解とまわりの人たちが環境への共感を育む。この学びの循環を具現化するための1つの提案として指導案の工夫を挙げたい。毎時の授業の指導案が家庭科全体の大きな目標と有機的に結びつくような新しい家庭科の指導案フォーマットの検討である。どの領域の、どのような学習課題を扱う時も、一つひとつの授業が家庭科の大きな目標に結びつくようなくなく共有できれば、教師はその1コマを自信をもって展開し、「きつとやれるにちがいない」と子どもたちをエンパワーし続けることができるのではないだろうか。

【岡】
 中・高等学校の家庭科教師の多くは、教科目標や教科内容から授業を捉えることはできるが、教科独自の価値や重要性のよりどころとなる背景学問について明確に語ることは難しい状況にある。このことは大学の教育課程のもつ課題とも言える。生活に係る諸課題を乗り越え自立し他者と共によりよく生きることを追求する家庭科教育の学びの意義について、学術的根拠をもって語ることでできる家庭科教師の育成を目指したい。その解決策の1つとして、家政学を教育課程に位置付けることが考えられる。IFHEは家政学を「個人・家族・コミュニティが最適かつ持続可能な生活を達成するための学術的な学問」(工藤 2009)と定義しており、それは「生活の営みに係る見方・考え方」(学習指導要領 2017)が目指す方向にある。今後、家政学を背景学問として教育課程に位置付ける研究を深め、専門諸科学との往還を原理とした組織的な科目構成が必要ではないだろうか。

【正保】
 今後の日本の家政学や家庭科の可能性を考えると、それらの出発点と歴史を改めて見直す必要を感じる。戦後の家政学は、戦前からあるベーシックな学問に応用科学として仲間入りするために、多くの研究者が「家政学原論」の名のもと「複合科学」としてその本質を考え、また議論を重ねてきたが、現在では多くの分野が「学際性」「学際領域」として環境・気候変動の問題や人権問題などを含めたSDGsに取り組むことは当然のこととなっている。

一方、社会科とともに新しい教科として成立した家庭科は、「三否定」の普通教科として出発し、中等家庭科では、普通教科と職業教育としての意味合いも持つ複雑な性格を併せ持っていた。家政学は、家庭科の背景学問として機能してきたにも関わらず、両者の関係を明確に認識することが難しいなど、出発時点での複雑な事情が、その後の日本の家政学・家庭科の迎ってきた道のりの険しさに繋がってきたのではないかと考える。しかしながら、ここに来て時代は大きく変動している。AIが多くの仕事をこなし、気候変動やWithコロナの中で心身の健康に気を付けながらいかに潤いのある生活していくのかという課題の中において、IFHE(国際家政学会)は、2008年に「家政学は『個人・家族・コミュニティにとって最適で持続可能な暮らしを実現する』ための(自然科学、社会科学、人文科学という枠組みを超えた)『人間科学』であり『専門』である」というポジションステイメントを出し、①学問領域②日常生活③教育領域④社会領域で活動できる分野であると主張している。

日本においても、家政学や家庭科教育学は、先に挙げた環境・気候変動問題や人権問題に配慮しながら、生活そのものをいかに健康的で気持ちの良いものにしていくのかということに長きにわたって向き合ってきたが、それぞれが独自に歩んできたきらいがある。まずはその両者の関係を構造的に認識しながら、これからの時代をリードしていく分野として力を合わせて生活者として生きる個人・家族・コミュニティに発信していくべきである。

【佐藤】
 「教育課程における家庭科教育の独自の価値と大切さを、自信をもって子供たちに伝え、追究できる家庭科教師を育てるために、中等家庭科教員養成で必要なことや課題」としては、次の三点が考えられる。

第一には、家庭科の背景学問の理念と学校教育の理念の重なりから、家庭科を捉えること、つまり、家庭科の学校教育における本質的意義に関する学習、家庭科教科観の構築の基盤となる学習を教員養成教育で行うことである。家庭科教科観は教師としての成長の過程において、変化を伴うものかもしれない。しかし、教員養成教育において家庭科教科観の豊かな土壌をつくることが求められると考える。

第二は、教員養成教育で学ぶ学生自身は今まさに、家政学の理念と学校教育の理念の重なりから、家庭科教育を学習する渦中にあり、〈学習者である私〉と〈教育を行う私〉を行き来しつつ学習を蓄積しているといえよう。その実態を見逃さず、家政学の理念に基づき再構成された各専門分野の知見を学習者として学びつつ、社会の変化や児童生徒の実態という側面に立ち、それを授業に〈変換〉するための学習を行うことが求められると考える。

第三は、「現代的課題」に着目した学習の必要性である。家庭科が学習者の現在および将来のよりよい生活を志向することから、「現代的課題」への着目は重要と考える。家庭科が学習対象とする日常生活は変化するものである。日常の生活は毎日続く。決して後戻りすることはできず、進んでいく。過去に起きたことが、それ以後の生活や将来の生活への影響をもつことから、「現代的課題」に着目することは、将来のよりよい生活につながる、重要な視点であると考える。

本研究では「家庭科の学問背景に基づく教科観の明確化と教科教育と教科専門担当者の実質的な連携」が行われたことから、上記3点の課題の解決にむけた取り組みがなされたものと考えられた。

【梶山】
 生活を主体的に営むためには、生活を総合的に捉え、実践しなければ意味はなく、そここそ価値がある。家庭科の先生方には、他教科とは違う家庭科の独自性や価値に気づいて自信をもって家庭科を教えてほしい。特に、進学校で「家庭基礎」を教えている先生方には、家庭科の必要性や魅力を伝える力や工夫が必要である。自分ならどうする?ということを常に問いかける家庭科授業を実践してほしい。

中等家庭科教員養成では、学生自身に家庭科の総合性や実践性の価値に気づかせる場が必要である。進学校の「家庭基礎」で知識伝達のみの授業やストーリー性のないキットを使った製作実習などしか経験していない状況では、大学入学時に家庭科の総合性や実践性に価値を見出している学生は少ない。それらに気づかせるためには、他教科を知ることや問題解決的に総合的な学習の機会を設けることが有効である。

高校家庭科の先生方は、ベテランになるほど専門科目に関わる機会が多くなる。その背景には高い専門性や技能指導力をもった教員が少なくなってきた現状がある。しかしながら、ベテランの先生こそ、磨かれた教科観をもって共通科目を担当することに楽しんでほしい。

以上の通り、それぞれの専門の立場から、本研究に関わって情報発信した経緯を踏まえて言及された。それらの内容から、今後の家庭科教育やその教員養成、教師教育に対する指針を得た。

5. まとめと今後の課題

教員養成を教師教育の一環として捉えたとき、生活者としての自立や成長を基盤として成り立つ家庭科教師の資質・能力は、生涯発達の中で変容していくものであろう。大学で家庭科教育を専門的に学ぶ以前に、家庭教育や学校教育の中で形成されている生活観や教科観は、教員養成カリキュラムの中での学びに影響を与える。また、教師の立場になってからも、自分のライフスタイルやライフステージによって教科観は変容

していく。

長い教員人生において、大学での4-6年の家庭科教員養成時期に何を学ばせるのか言及することは簡単ではないが、共通基盤として生活の成り立ちとその変化を捉える視点をもたせること、および変化する教育課程の中で、生活者育成に係る独自の教科の枠組みの重要性を理解させることが重要ではないかと考える。家庭科教員養成に関わる立場として、このことを意識し、今後も関係者で協働体制を構築できることを期待しながら具体的なカリキュラム開発を続けていきたい。

謝辞

当該のシンポジウムおよび情報交換会に参加してくださった皆様にお礼申し上げます。また、広島大学大学院人間社会科学研究科今川真治氏と富永美穂子氏には、本報告、科研助成事業のメンバーとしてお世話になりました。ここに感謝の意を表します。

本研究は、JSPS 科研費19K02814の助成を受けたものです。

引用・参考文献

- 1) 鈴木明子, 村上かおり, 梶山曜子「家庭科教員養成における教科観の構築に関する研究—広島大学人間生活系コースにおけるカリキュラムの検討・改善をめぐって—」広島大学大学院教育学研究科紀要第二部第65号, 2016, pp.257-264
- 2) 鈴木明子, 村上かおり, 梶山曜子他「広島大学人間生活系コースにおける家庭科教員養成カリキュラムの検討—教科観を育むガイダンス授業の構想—」広島大学大学院教育学研究科紀要第二部第67号, 2018, pp.289-298
- 3) 村上かおり, 鈴木明子「広島大学人間生活系コースにおける家庭科教員養成カリキュラムの検討—家庭科内容学としての衣生活内容の構想—」広島大学大学院教育学研究科紀要第二部第67号, 2018, pp.299-308
- 4) 鈴木明子, 金崎悠, 村上かおり, 富永美穂子, 松原主典, 高田宏, 今川真治, 梶山曜子, 平田道憲「広島大学人間生活系コースにおける家庭科教員養成カリキュラムの検討—衣・食・住生活概論の構想と成果—」広島大学大学院人間社会科学研究科紀要「教育学研究」第1号, 2020, pp.136-145
- 5) 日本教科内容学会第7回研究大会(紙面開催)課題研究発表資料「家庭」の教科内容構成を基にしたシラバス提案と批評文 平田道憲・鈴木明子・村上かおり・富永美穂子 広島大学(人間生活教育学コース協力による)(批評)工藤由貴子・佐藤ゆかり(2020年8月7日)
- 6) 鈴木明子「連載コンピテンシーベースの授業づくり(8)家庭科の資質・能力育成におけるカリキュラム水準の文脈づくりの意義」(指導と評価, vol.63-3, 2017, pp.59-61)
- 7) 科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)課題番号19K02814(代表 鈴木明子)交付金によるシンポジウム資料(2019年10月20日)